今月の特集

造る

市内にはいろいろな職業の人が生活を営んでいます。

産業はその時代時代の特色を映しだす鏡。一次産業に従事する人、最先端のサービス業に従事する人。

しかし、先端産業も時の移ろいのなかで、時代のひのき舞台から去っていくのも必然です。

今回は、そうした失われつつある伝統産業に携わりながら、その道に一途に打ち込んでいる人にスポットを当ててみました。

仏像

吉本正行さん　夏崎

作業場に一歩踏み込むと、立ち並ぶ毘沙門天や不動明王、仁王さま観音さま。その中央に、仏像に彫刻刀を入れる吉本さんの姿がありました。

小さいころから彫るのが好きで、木を削って遊んでいたそうです。京都で十年ほどの修業生活の後、帰高。現在伝統的な彫り方を学んで生業としているのは県下で一人だそうです。

「今はもっぱらお寺の仏像の修理。なかには個人的に仏像を頼みに来る人もいます。装飾品や美術品として求められます。信仰の対象としてこだわる必要はないのでしょうか」と言う吉本さん自身、彫刻に魅せられた一人。

はく製

高島田常意さん　物部

高島田さんは今年で七十九歳。昭和二十六年、義父が死去したのをきっかけに、その後を継ぐ形ではく製作りを始めました。「農家であったため、義父も私も生活のためでなく、農業の合間の道楽程度でした。昔は猟が解禁になるとたくさん頼まれたものです。最近は禁猟になった鳥も多くなり、持ってくる人もぐっと減りました。

クマタカなどの猛禽類は翼の模様にも気品があり、大好きですが、染をみることがほとんどなくなりました」五～六年前に事故で死んだクマタカを林野庁の依頼で手掛けたのが最後とのこと。

「この近くの物部川の河口にも、昔はナベツルやアオサギが飛来していましたし、ベニスズメやレンジャクなどの、かわいくて美しい鳥がたくさん身近に見れたものです」

河川改修や天然林の減少の進むなかで、多くの種類の生き物が消滅し、さらに狩猟による乱獲が原因と、「私も年ですし、ちょうどのころ合いかも」と長いはく製作りを振り返って、少しさみしそうに。

はく製造りが産業として成り立つためには、野にも山にも多くの生き物が生活し、豊かな自然に恵まれていなければならないことを語っています。

「彫るときは何も考えていません。作品に対する思い入れが強すぎると、客観的に見ることができませんから。作品を突き放して見れることが、上達の第一歩でしょう。名のある仏師の作品にぶつかると、やはり、自分の未熟さを思い知らされますね。それと安らぎですかねえ」と彫刻に対する思いを語ってくれました。

三十㌢ほどのものを彫るのに一～二カ月かかるという根気のいる作業。これからも、ひのきや杉などの木片に、数多くの仏様が彫りこまれ生命力が吹き込まれていきます。

欄間

三好至さん　久礼田

「厳しい修業も彫刻が好きだからこそ我慢できたんです」と昔を振り返り語ってくれるのは、久礼田でランマ製作所を営む三好さん。子供のころから彫刻が好きで、十五歳から一人大阪の彫刻家のもとで修業を積み、それ以来現在まで二十九年間、欄間を彫り続けています。

「既成の原画は扱っていません。二つ同じ欄間を造らないように努力してるんです。何にしてもそうですが、世の中に二つ同じものがあったら、それ自体の価値が半減してしまうでしょう。下絵はお客さんの要望に合わせ、立場を考えた上で、自分の納得がいくまで何度も描き直します。そして一つ一つ自分の手で彫っていきます」と職人気質らしく自分に大変厳しい三好さん。

欄間をいかに動きのあるものにするかがとても難しいそうで、「笹の葉一枚の向きによっても受ける印象がずいぶん違うんですよ。全体の絵の動きを把握して、より実物と自然に近い形で彫っていかなければいけないんです」とのこと。

「わたしの未熟な彫りをお客さんが注文してくださる以上、精一杯の仕事をさせてもらいたいです。私の彫った欄間が長い年月飾ってもらえたらとてもうれしいですね。また家を壊しても磨き直して新築の家に飾ってもらえるくらいの欄間を彫っていきたいです」

刀

岩本貞弘さん　大埔

「自分の打った刀で満足のいくものは一本もありません。気に入るものは一生できないでしょう」

妥協することなく、常に理想に近付くために刀を打ち続ける岩本さん。職人らしい一本筋の通った頑固そうな方です。

「刀との出会いは、小学校のとき、鑑賞会で見た刀が一目で好きになりました」中学校に入ってからは知り合いの研ぎ師の家に出入りし、刀のことを学んでいたそうです。

作業の間どのようなことを考えているのか聞くと「仕事にとりかかる前にどんな刀にするか決めておいて、打ち始めたら無心です。無意識に体が動きますね。周りに人がいたら気が散って打てません」と語ってくれました。大変な集中力を必要とする作業だそうです。

明治四年に廃刀令が出され、刀を使うことがなくなり、それと共にそれまでの技術は失われました。現在は文化庁から刀匠としての許可がないと打てなくなりました。「昔の刀は素晴らしいですよ。今の技術では到底できません。多くの職人が昔の技術を取り戻そうと頑張っていますが、年に二十四本という制限があり、打つ機会も少ないですし……」

刀を打ち始めて二十年、「嫌になることが多いです。自分の思い通りにいきませんから。でも好きだからやめることはできません。打てなくなるまで打ち続けるでしょう」刀鍛冶としての人生はこれから先が長そうです。

神社

前中善雄さん　大埔

建築業を営む前中さんは最近では数少なくなった宮大工さんで、県内の神社を改築、改修したりと、活躍中。今年十月に長岡の八坂神社の改築を終え、落成を迎えたばかり。

「最初は指物大工を目指して家具などの造り方を勉強していました。でも時代の流れと共に機械化され、自分の手で一つの物を造れなくなって…。そこで一品自分で造れるものは家しかないと思い、宮大工を一生の仕事に選んだんです」

それから約十一年間の修業生活。初めて神社を改築したのは十年くらい前で、雨降山の神母神社。その後七測神社など、数々の神社を手掛けてきました。

「大工という仕事は一ミリ単位の細かさを要求される仕事なので大変難しいですが、その分やりがいがありますね。一つの神社を完成させるのに七カ月くらいかかります。これから先、何百年も残っていくものだから、誠心誠意真心を込めて取り組まないといけません。建築中は肉類は食べないようにしてるんですよ」と仕事にかける心意気が感じられます。

今でも本を読んだり、実際にいろんな神社を見に行って研究したりと、大変勉強熱心な前中さんの夢は、大きな寺社の建設とのこと。ますます後継者不足が深刻化してくるこれからの時代、前中さんのような若い宮大工さんの活躍は大変頼もしく感じられます。

ひのき笠

宮本秀子さん　奈路

お遍路さんに欠かせないのがヒノキ笠。その笠を生産しているのが宮本さん。

注文は多いそうですが、作り手が不足していて、秀子さんの作業所でも笠を縫えるのは宮本一二三さん（写真の方）だけに。

「戦後しばらくは、この地区の住民の半数がこのヒノキ笠の生産で生活していましたが、今は二軒になってしまいました」と当時のにぎわいを思い出すように語ってくれました。

かつてはほとんどが手作業で、一つの笠を作るのに、木を削る人、生地に織る人、縫う人など多くの人が分業で作っていたとのこと。

秀子さんは、長崎の原爆でご主人を亡くしてからは、女手一つでこの仕事を続け、三人の子供を育ててきました。

「以前は生活必需品で、ほとんどを北陸方面に出荷していました。当時は寝るところ以外は家の中は笠でいっぱい。子供も学校から帰るとアルバイトをして小遣いを稼いでいました」

生活様式の変化から、笠はさほど必要とされなくなり、産業としては衰退していきました。

しかし、この地区にも明るい話題が。市街地に比較的近いため、最近は若い人もかなり定住し、そのなかから地域興しのグループも活躍。「おかげで奈路が多くの人に知られるようになりました。保育園に通う子供も増え、元気なはしゃぎ声が聞こえますよ」

次代の産業の担い手の登場に心躍らせています。